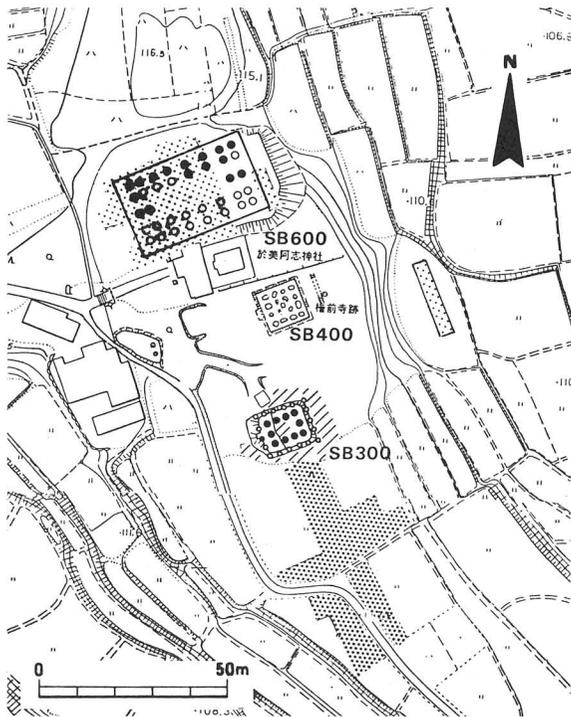


## 桧隈寺第3次の調査

(昭和56年7月～昭和56年11月)

桧隈寺は有力渡来系氏族の一つである倭漢氏一族の氏寺として造営された。高取山から北西に延びる丘陵上の先端部に立地しており、その位置から、古代飛鳥の王陵地帯ともいわれる桧隈の地を一望することができる。丘陵の馬背部を整地した平坦地には、三つの土壇と礎石の一部が残っており、現在は倭漢氏の祖とされる阿知使主を祀る於美阿志神社の境内地となっている。

発掘調査は昭和54年度から始まり、本年度で第3次調査を迎えた。今回の調査は、講堂跡といわれる北側の大きな土壇と、回廊の取付きを明らかにする目的で実施した。講堂跡には13個の礎石と、その抜取り穴の痕跡が認められ、古くから桁行7間、梁行4間の東西棟礎石建物と推定されていた。今回の調査では、建物の中央部を含めた西半部と基壇東辺部を発掘した。なお、平坦地より



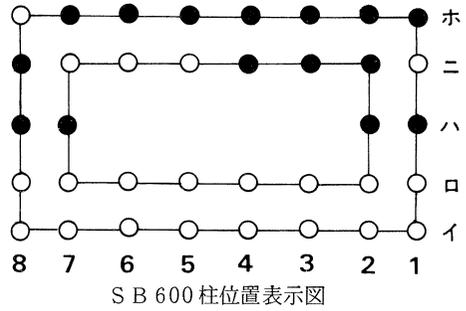
調査地位置図(1:2000)

5m下の傾斜地東側(県所有地)に調査区(東西3m, 南北20m)を設定し調査したが、遺構は検出できなかった。

調査の結果、講堂跡SB600とその基壇、付属施設として階段、雨落溝、足場穴等を検出した。また、講堂廃絶後に基壇上に三間堂形式の仏堂SB601が建てられていることが判明した。なお、SB600の各柱位置には次頁図のように番付をして表記することにした。

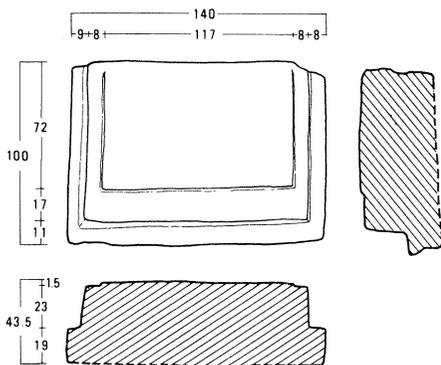
講堂SB600の遺構 SB

600 は桁行 5 間，梁行 2 間の身舎に四面  
 廂のつく東西棟礎石建物で，桁行 7 間，  
 梁行 4 間の規模をもつ。桁行総長 29.4 m，  
 梁行総長 15.3 m である。柱間寸法の基準  
 尺を 29.4 cm とすると，桁行は中央 3 間（3  
 -4，4-5，5-6）が 16 尺，両脇各 1 間が



15 尺，廂が 11 尺となる。梁行は身舎 2 間（ローハ，ハ-ニ）が 15 尺，廂（イ-ロ，ニ  
 -ホ）が 11 尺となる。すなわち，桁行 100 尺，梁行 52 尺の建物となる。礎石は南  
 側柱列（イ，ロ列）は総て抜き取られているが，妻柱と北側柱列（ホ，ニ列）では  
 15 個の礎石が原位置を保っていた。1ハの礎石は打ち欠かれており，一部が残存  
 しているだけである。礎石のうち 14 個については，長大な花崗岩の自然石であ  
 るが，2ホの礎石は凝灰岩製切石（竜山石）を用いる。この切石は 7 世紀代の石  
 棺式石室の底石を転用したものである。大きさは長辺 140 cm，短辺 100 cm，厚さ  
 43.5 cm である。東北隅 1ホの礎石上面には径 30 cm，深さ 25 cm の逆円錐状の穴を  
 穿っている。現存する礎石はいずれも基壇上面で据え付け痕跡が認められない。  
 基壇築成途中で礎石を据え付けた後，基壇上面まで土を積み上げたと思われる。  
 なお，礎石抜き取り痕跡で確認できる根石には大きな自然石を用いている。

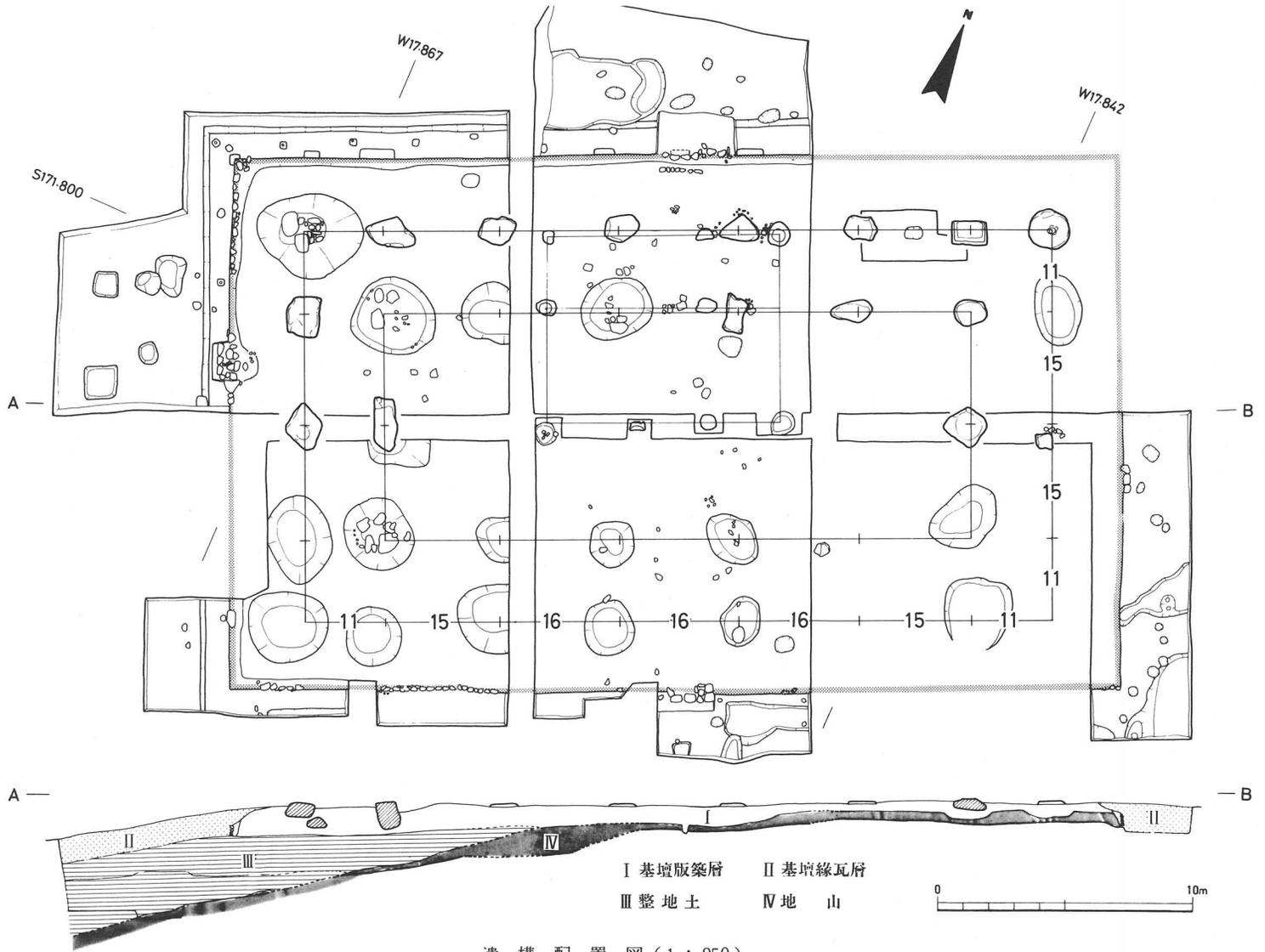
**基壇** 基壇築成方法は，丘陵の旧地形を利用していることが判明した。基  
 壇の東半部は旧地形の尾根筋にあたるため，地山を削り出して成形し，西半部  
 は斜面にあるため，一旦基壇下まで整地した後，その上を粘質土で版築してい



2ホ礎石実測図

る。基壇の規模は東西幅 35.3 m (120 尺)，  
 南北幅 21.2 m (72 尺)，高さ 1.2 m であ  
 る。建物の柱位置から基壇の出は 2.94 m  
 (10 尺) となる。基壇の外装工法はいわ  
 ゆる瓦積基壇で，後に玉石積みで補修さ  
 れている。

瓦積は基壇基底部からじかに平積みし  
 ているが，北面の西側では一部自然石を



遺構配置図(1:250)

用いた地覆石の上に瓦を積んでいる。基壇に用いられている瓦は平瓦を半截した熨斗瓦状のものを平積みするが、一部に重弧文（Ⅱ A～C）、偏行唐草文（Ⅲ A）の軒平瓦、単弁蓮華文（Ⅰ A）や複弁蓮華文（Ⅲ A）の軒丸瓦を差し込んでいる。瓦積は北面が最も残りが良く、基底部から平均して約60cm残存している。西面と南面は玉石積みで後補するため、西面で5枚、南面で1～2枚が残る程度であった。基壇上面にはいくつかの方罫が認められ、また基壇周辺の瓦堆積層からも90点近くの方罫が出土しており、創建時には基壇上面が舗罫されていたと推定される。玉石積みは人頭大のものから幅50cm、長さ70cm程の自然石を用いており、南面では2段まで確認できる。土層の観察から、玉石積みの補修を行った時期には、瓦積基壇の基底部がすでに15cmほど埋もれていたことが判明している。この玉石積みは西面北側で瓦積基壇よりやや西偏する。

基壇にとりつく階段は後補の玉石積みに伴うもので、創建時の瓦積基壇に伴うものは確認できなかった。南面・西面・北面で検出し、いずれも玉石を用い、基壇に入り込んだ形で取付く。西面階段は身舎北間（ハ一ニ間）に設置され、幅1.5mで2段が残っている。南・北面階段は中央間（4一5間）に取付き、玉石列2段が残る。幅・出とも不明だが、現存する石列から考えて、3m以上の幅をもっていたと推定される。

雨落溝は基壇端から約1mで検出した。幅約20cm、深さ5cmの素掘りの溝で、基底部の整地土を切って作られている。東面では雨落溝は確認できなかった。雨落溝の位置から推定して、建物の軒の出は約15尺であったと考えられる。北面と西面の基壇端と雨落溝の間の犬走りで一辺25cmの掘形をもつ小柱穴を検出した。柱間は9尺前後で軒足場と考えられる。北面では、瓦積の外装を行う前の足場穴と考えられる一辺約50cmの柱掘形を瓦積基壇の直下で検出した。柱間は10尺前後で、その部分が後に沈下したため、瓦積の基底がほぼ3m単位で弧状を呈している。

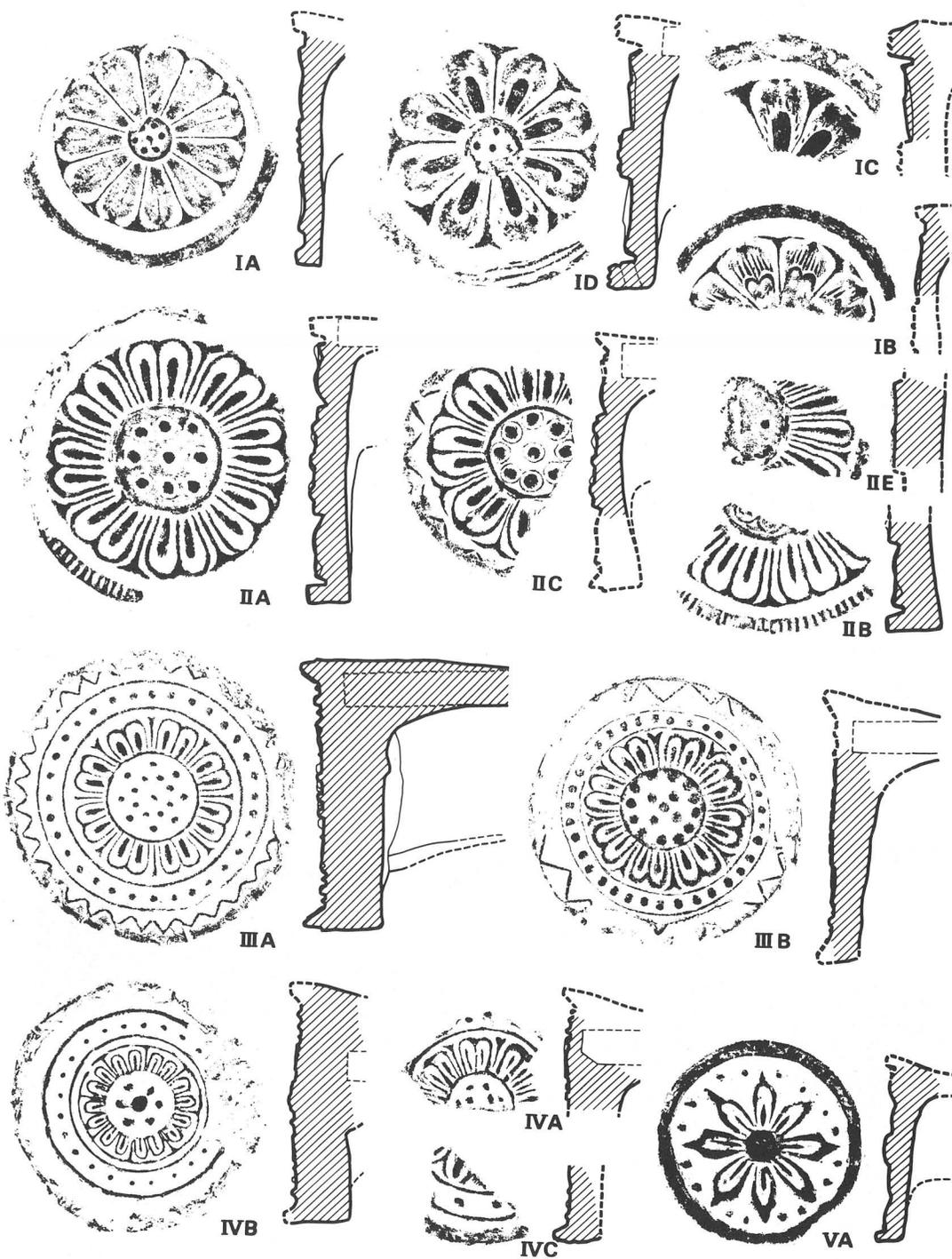
**S B 601** 講堂 S B 600 廃絶後に基壇中央北半部に礎石建物 S B 601 が作られる。S B 600 の北側柱ホ列、身舎北側柱ニ列、妻柱ハ列の各柱列に、東西3間分の礎石とその据え付け痕跡を検出した。西から1間目の礎石は S B 600 の

礎石をそのままの位置で再利用している。南から1間目については礎石やその痕跡を検出できなかったが、3間×3間の仏堂と考えられる。東西行の柱間は3.0 m，南北行の柱間は、北1間が2.8 m，南2間が各2.2 mとなる。新たに検出したSB601の4個の礎石のうち3個については、円形柱座の造り出しをもっている。他の堂宇の礎石を転用したものであろう。礎石は基壇上を浅く掘り凹め、根石の代りに埴や瓦をつめ込んで水平を保たせている。

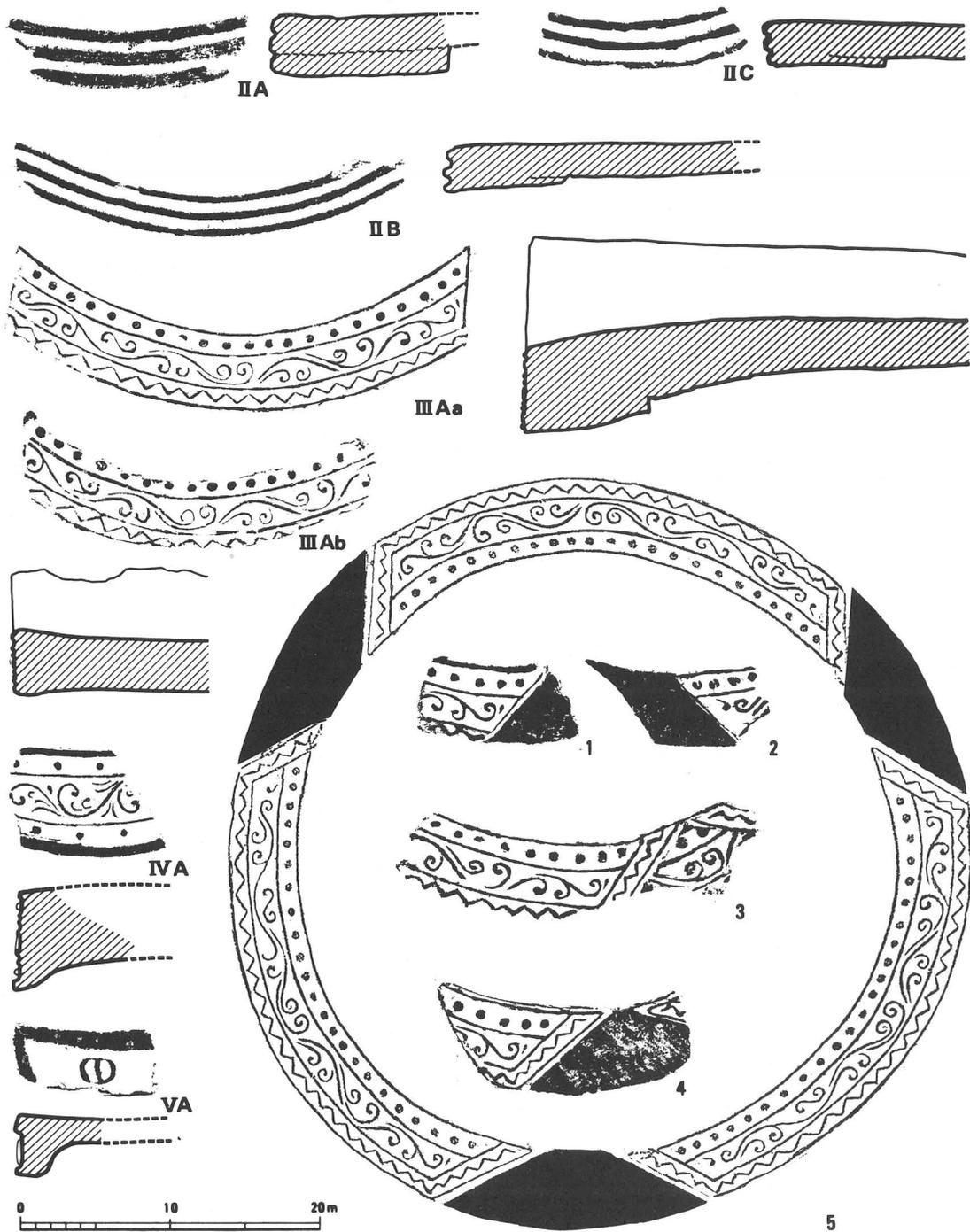
**遺物** 遺物は莫大な量の瓦類、土器や金属製品が出土した。瓦類は大半が基壇縁に崩落した状態で堆積し、厚い瓦層を形成する。瓦類の大半は丸・平・軒瓦で、篋書きの瓦も含まれる。他に面戸瓦・熨斗瓦・榿先瓦等の道具瓦と方埴が出土した。軒瓦は489点出土し、内訳は軒丸瓦191点15種、軒平瓦298点6種である。軒丸瓦には7世紀代のものとして、前半のⅠ-A・B・C，中頃のⅠ-D・E，後半のⅡ-A・B・C，Ⅲ-A・B・Cの各種がある。Ⅱ-Bは素弁八弁の中に火焰をもつ複子葉を配しており、例をみない。Ⅰ-Dは子葉に火焰をもつ山田寺式で、広島県横見廃寺と同範である。8世紀代のものとしてⅣ-A・B（平城宮式6282 B・6133系），平安時代のものではⅤ-Aが出土した。軒平瓦は7世紀代の重弧文Ⅲ-A・B・Cの3種，偏行唐草文Ⅲ-A・Bの2種，8世紀代の東大寺式Ⅳ-A（6732 A），中世の瓦Ⅴ-Aがある。軒瓦



瓦積基壇（北面）



軒丸瓦実測図



軒平瓦実測図(1~4隅軒平瓦, 5復原図)

のうち、今回最も多く出土したものは、いわゆる藤原宮式の軒丸瓦Ⅲ-Aと軒平瓦Ⅲ-Aの組み合わせである。他に榿先瓦が3種出土している。また、隅軒平瓦は軒瓦桶巻作りを傍証する資料として注目される。この資料はⅢ-Aの范型を用いており、一つの瓦当面に范型の右端と左端が押されている。一つずつ軒平瓦を作るとしたら、こうした押捺はしないであろう。おそらく、平瓦と同じように桶巻作りで顎の付いた瓦円筒を作り、円周に沿って范を連続して押捺した後、分割したためと考えられる。軒平瓦の完形品から円周を復原すると、今回の例はたまたま通常の軒平瓦の瓦割りより大きく分割を必要とした隅軒平瓦にその痕跡が現われたといえよう。

土器には基壇上面・基壇縁瓦層・土壙等から出土した7～15世紀に属する須恵器・土師器・黒色土器・瓦器・白磁・青磁がある。そのうち基壇上面には11～15世紀の土師器皿や瓦器碗が多量にまとまった状態で堆積していた。金属製品には開元通宝を含む数点の中国銭・青銅製花瓶のほか100点以上の鉄釘がある。鉄釘の大半は基壇縁瓦層から出土した。

まとめ 今回検出した礎石建物SB 600は、桁行100尺・梁行52尺という規模から、講堂跡であることはほぼ間違いない。規模としては、飛鳥寺や法隆寺西院の講堂に匹敵する。創建年代は、藤原宮式軒丸瓦と軒平瓦の組合せが主体を占めることや瓦積にも同種の瓦が使用されるため、7世紀末と考えられる。塔も同じような出土傾向を示すこと、礎石が自然石である点から、講堂と一連の造営と考えられる。第2次調査で金堂とした建物には、Ⅲ形式より一時期古い検限寺式の軒丸瓦Ⅱ-

型式		講堂 SB 600	金堂 SB 300	南門 (1次)	塔 SB 400
軒	I-A	3	1	0	0
	B	4	5	0	0
	C	1	0	0	0
	D	3	0	0	0
	E	1	0	0	0
丸	Ⅱ-A	10	80	7	1
	B	2	1	3	0
	C	3	4	1	1
	D	0	1	0	0
	E	1	0	0	0
瓦	Ⅲ-A	130	15	4	6
	B	4	8	1	0
	Ⅳ-A	1	3	2	0
	B	2	0	0	0
	C	1	0	0	0
平	Ⅱ-A	8	57	10	3
	B	12	40	3	0
	C	17	29	0	0
	D	0	15	0	0
	Ⅲ-A	218	36	2	24
瓦	B	0	0	1	0
	Ⅳ	1	3	0	5
	Ⅴ	1	2	0	0
榿先瓦A		4	61	13	1
B		1	38	1	0
尾榿先瓦		1	21	0	0

出土瓦一覧表（型式不明については表の点数に含まれていない）

Aと軒平瓦Ⅱ-Aの組合せ（7世紀第Ⅲ四半期）を用い、礎石も円形柱座の造り出しをもつ。このことから、まず金堂SB300、やや遅れて講堂SB600、塔SB400が作られたという造営過程が判る。ただ、講堂跡からは7世紀前半期の軒瓦も出土し、基壇築成時の整地土からも同時期の瓦が出土しているので、瓦積基壇をもつ講堂以前に、先行建物の存在も考えられる。しかし、現在のところ遺構からその先行建物の存在を知る手がかりは得られていない。瓦積基壇を補修して玉石積み基壇に作り変える時期は、東面の階段裏込めから出土した土器から、平安時代後期（11～12世紀）と推定される。その時期は塔跡に十三重塔を設置した時期とほぼ一致する。

廃絶時期については明確でないが、廃絶後の礎石建物SB601は、出土土器から判断して、14～15世紀に建てられたとみられる。このSB601は三間堂形式の仏堂であるが、これに伴う瓦は出土していない。

今回検出した瓦積基壇は近江の崇福寺・南滋賀廃寺、山城高麗寺、大和山村廃寺など7世紀後半の寺院にみられる外装工法で、近江や山城地方に集中している。飛鳥地方の寺院では初めての発掘例である。また瓦積基壇は百済定林寺・扶蘇山廃寺、軍守里廃寺等、朝鮮の多くの寺院で用いられており、日本への導入も渡来系氏族との関係が指摘されている。松隈寺の基壇化粧が瓦積であることも、本寺が倭漢氏の氏寺と考えられることと関わるのかもしれない。

これまでの調査で、塔・金堂・講堂の主要伽藍が明らかになった。その位置関係は講堂と金堂の中軸線が一致し、心々距離は約67.8mとなる。塔の心は中軸線から東へ約11m離れ、講堂と塔の距離は36mであるが、講堂基壇東端と塔基壇東端が揃うことになる。主要伽藍の方位は真北に対して23°～24°西偏している。これは丘陵上という制約もあろうが、条里制地割や古道との関連も検討する必要がある。

今回の講堂の調査でも回廊の所在は明らかにならず、塔の南に金堂を配する点など伽藍配置や規模・方位についても、まだ充分解明しえない問題を残している。今後の調査研究の進展にまつところが大きい。